アーシャ事務局便り

特定非営利活動法人
アーシャ
ASHA　アジアの農民と歩む会
事務所・交流センター
〒329-2703　栃木県那須塩原市槻沢８３－１７
TEL／FAX　０２８７－４７－７８４０

❀ あなたの想いを世界へ、あなたのご寄付でアーシャの活動を支えてください。

2024年度冬のアーシャ理事ミーティングご案内

三浦副代表の一時帰国に合わせ理事ミーティングを開催いたします。会員の方々もご参加いただけますので希望される方は、前日までに国内事務所までご連絡ください。
日時12月18日(水)19時-21時
対面：アーシャ国内事務所
オンライン：Zoomをご案内します

2024年度定期総会と20周年公開セミナーのご報告

2024年6月1日那須塩原市健康長寿センターにてアーシャ定期総会と「北インド農村開発・女性支援」と題して川口景子さんを講師に迎えてセミナーを開催しました。オンライン、対面で多くの方々にご参加いただきありがとうございました。総会も無事終了することができました。

グローバルセミナーご報告

7月21日(土)栃木県国際交流センターにてアーシャグローバルセミナーを開催しました。

会員のご継続とクリスマス募金のお願い

当会の活動は会員の皆様の会費とご寄付に支えられています。皆様よりご支援･ご協力をいただき、活動を継続できますことを心より感謝申し上げます。クリスマスの季節アーシャの活動をさらに発展･強化するために、会員のご継続と会費のご納付･ご寄付･クリスマス募金よろしくお願いいたします。振込用紙の必要な方は事務所までご連絡ください。

http://ashaasia.org/shien1/

ネットショップ「ASHA STORE」でもアAVS商品販売･会費･ご寄付を扱っています

https://ashaasia.stores.jp/

事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2024.4.1～2024.11.15　順不同、敬称略

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

正会員	【岩手県】澤谷常清・ひろみ【栃木県】飯沼一浩・淳子、長嶋清、天知稔、高木国男、今野善郎、【東京都】及川洋征【福井県】松田宗一
賛助会員	【栃木県】川上聖子、池田桂子、菊地紀子、三浦邦彦、小高加代子、漆原雅子、郷かしこ【東京都】吉田千佳子、松橋尚子【岐阜県】植西訓聖【大阪府】山本よしこ【福岡県】坂口馨子
終身個人正会員	【栃木県】大浦宏勝、村上和子、
終身個人賛助会員	【栃木県】三浦友萌
一般寄付	【栃木県】天知稔、飯沼一浩･淳子、加藤恵、小島勇･清子、福田本子、今野善郎･歩、那須塩原教会【北海道】奥村昌子【兵庫県】溝上富夫【埼玉県】二宮牧雄（遺贈寄付）【福岡県】日吉台教会
指定寄付	【東京都】社会貢献支援財団、日本キリスト教団全国教会婦人会連合、石川信克【栃木県】大浦宏勝【北海道･栃木県･大阪府･広島県･滋賀県･神奈川県･熊本県･三重県･福岡県･福島県･青森県･愛知県静岡県･埼玉県･岐阜県】各地より、クラウドファンディングにご支援くださった皆様

■**会費**　個人正会員　5,000円　団体正会員　20,000円　終身個人正会員　50,000円　終身団体正会員　100,000円
個人賛助会員 3,000円　団体賛助会員 10,000円　終身個人賛助会員 30,000円　終身団体賛助会員　50,000円

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会　☆この会報は日本で製作･印刷しています☆
＜事務局・交流センター＞〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17　TEL：0287-47-7840　FAX：0287-47-7841
事務局　E-MAIL: info.jp@ashaasia.org　ホームページ: http://www.ashaasia.org

第７５号　２０２４年１２月１日

特定非営利活動法人 アーシャ

ASHA　アジアの農民と歩む会

会報 75号

11月5日、マキノスクールの稲刈り

共に稲刈り、束ね、食べ、感謝！感謝！

ムラを元気にしよう！

～女性インフルエンサーを育てる～

インド事業統括責任者･三浦　照男

就学年数とインドのカースト（社会階層）には強い因果関係があります。民衆が読み書き算数できるだけでも社会環境は大きく変わると云われています。私が赴任した20年前に比べるとインドの教育熱が一段と高まっているようです。15年前に私たちが実施した村落調査では女性の6割、男性4割が簡単な読み書きすらできませんでしたが、現在は2割程減っています。また、女性の就学率も伸びています。貧困から脱出するには、教育が重要との認識が浸透してきているようです。これはよい方向に向かっていると思いますが、単に喜べないのも事実です。教育を受けるのは自由ですが、村の子どもたちが皆、同じように教育を受けられる状況ではないからです。

インドのカーストと「資格」の概念

インドは西洋と東洋の中間に位置し、西欧とも東洋とも違う特有な宗教と価値観を発展堅持してきました。仏教発祥の地ということで、日本に馴染みの深い国と思いきや、インドを訪れる日本人の殆どが大きなカルチャーショックに見舞われます。それだけ、理解しがたい異文化や異なる価値観を持つ国であることがわかります。

社会民族学者の故・中根千枝氏によるとカースト社会は「資格」を優先させてきたと指摘しています。例えば、結婚できる相手の資格は同類のジャティー（生来の職業）でなければならない内婚を重要な倫理としました。この倫理感によりカーストが固定されたのです。更にカーストに社会階層と差別を植え付けることで、社会の安定を図ろうとしました。高等教育は僧侶、貴族等の上位カーストのもの、汚い仕事、肉体的に辛い仕事は下位カーストのものと何千年も前から社会階層として固定されてきたのです。このようにカーストをベースとした資格認識により、高等教育を受けるべき者、学校に行かなくてもよい子が区別されてきたのです。学校で勉強している時間帯にフラフラしている子どもたちを見て「何故あの女の子は学校に行かないの？」と村人に訊ねたら「この子は学校に行く必要がないのよ」とぶっきらぼうな答えが返ってきました。「あの子はアウトカーストだからで勉強しても何の役にも立たないわ」吐き捨てるように付け加えます。答えてくれた女性は半農半漁のカーストでアウトカーストとそんなに差はないのですが、上下関係の区別は相撲の番付にも似ているようです。

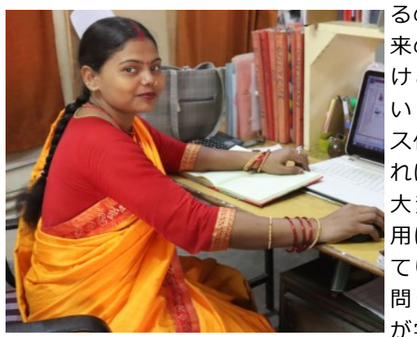
ヒンドゥー伝統文化の鎧

インド農村社会は強固なヒンドゥー教という固有な伝統文化と特異な価値観に支えられながら歩んできました。11世紀から約700年イスラム教徒に支配され、更に200年近くキリスト教徒であるイギリスに植民地支配を余儀なくされ、搾取されてきたという辛い歴史があるのです。世界を圧巻する強大な力を持つ一神教徒による屈辱的な支配でした。にもかかわらず、インドは多神教宗教・ヒンドゥー教とその文化を守り続けたのです。
現在、インドにはヒンドゥー教徒が80%、イスラム教徒が14%、キリスト教は3%とヒンドゥー教徒が大勢を占めています。このように長期にわたる異教徒の侵略はインドからヒンドゥー教を取り上げることはできなかったのです。それ程、インドの固有な伝統文化は強固であると言えます。

今ある底辺で生きるカースト社会で何が必要か

では、下層カーストの人々がその壁を破り、自らの社会的地位の向上を高めることができるのでしょうか？その答えは簡単でありません。ただ言えることは、マキノスクールの長期研修コースの卒業生や農村保健ボランティアを務め、その後マキノスクール開発関連事業のスタッフとして働いている彼女たちの自信に満ちた意欲的な仕事ぶりから、その答えのヒントが見えてきそうです。

例えば農村保健ボランティアとして働いたことがあるラダさんは、二児の母親です。耕作民のカーストに属する彼女はマキノスクールまで小さな乗り合い3輪タクシーで1時間以上かけて通勤しています。彼女に「子どもは政府系学校、私立学校、どちらに通わせているの？」と訊くと、「私立学校よ。英語で授業をしてくれるので子どもの将来のためにはよいけど、授業料も高いし、スクールバス代も支払わなければならないから大変」。「その費用はご主人が払っているの？」との問いに「直接、私が学校に行って、



パソコン作業中のラダさん

日本に於ける アーシャ事業への支援

事務局長･三浦　孝子

アーシャ20周年の今年は、思いがけない形でアーシャへの労いや支援が寄せられていることをご報告させていただけること、感謝いたします。
6月18日三浦照男副代表がアジア酪農交流会より「原田賞」を授与されました。アジア酪農交流会は学校法人酪農学園大学に事務局を置き、故学園長の原田勇氏（アジア酪農交流会初代会長)が初代会長でした。酪農学園大学関係の皆様には、アーシャをいつもお支くださり、心より感謝申し上げます。

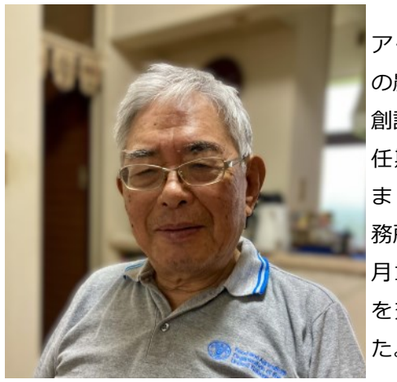
後列中央、表彰状を持つ三浦照男副代表

7月29日には、アーシャを社会貢献支援財団事務局が推薦してくださり、他団体と共に、表彰していただきました。東京での受賞式にはアーシャ女性理事・終身会員4名で参加させていただきました。

社会貢献支援財団の安倍昭恵会長が近くインドにお出かけになるとのことでしたから、受賞者訪問の一環で、ぜひ、アーシャの活動地、北インド、ウッタルプラデシュ州プラヤグラージをご訪問していただきたいとお願いしたところ、9月に実現いたしました。安倍昭恵氏は、在インド大使夫人と秘書の方と共に、デリーから日帰りでご訪問、マキノスクールの活動を視察し現地の方々と交流してくださいました。

また、2019年3月以降、ご寄付を続けてくださり、特にミャンマーからの研修生をご支援くださっていた埼玉県の二宮牧雄様が昨年夏ご逝去されました。2020年3月に計画中であったアーシャスタディツアーにぜひ参加したい、ミャンマーからの学生に会いたいとおっしゃってくださったのですが、コロナ禍のためかないませんでした。2021年6月5日の総会ではZoom でご参加くださいました。ここに生前のご支援を深く感謝しご冥福をお祈りいたします。
ご連絡をいただいたご令弟様より、かねてより遺贈寄付をアーシャへとの遺言通り、多額のご寄付を賜りました。心から感謝して、アーシャの今後の活動の　た　め、大切に使わせていただきたく存じます。

アーシャ＝アジアの農民と歩む会 新代表理事のご紹介



アーシャ＝アジアの農民と歩む会創設20周年。
任期途中ではありましたが、国内事務所の事情により8月1日より代表理事を交代いたしました。

アーシャ新代表理事・牧野　一穂

牧野一穂氏はアーシャ創設メンバーであり、アーシャ発足当時は副代表、その後、2009～2015年までアーシャ理事長を務めました。
牧野氏は、1967年、日本基督教団派遣宣教師としてインドに派遣され、2004年三浦副代表と交代するまでの約40年間、インド農村のためにご奉仕されました。
アーシャとは密接な関係をもつアジア学院が、1973年高見敏弘校長でスタートした時、牧野氏も1年間在職され、翌年、インドに戻り、アラハバード農業大学（現サムヒギンボトム農工科学大学）の中に継続教育学部（現マキノスクール）を創設されました。そのきっかけとなったのは、アジア学院　第1期卒業生の中にインドからの研修生がおり、彼から、日本まで研修生を送り出すことは、とても大変でお金もかかる。大勢を送ることは難しい。ぜひ、インドにも、アジア学院のような農村リーダーを育成する研修所を作ってほしいと懇願されたことだったそうです。
アジア学院の第1期生の中には、現マキノスクール学部長であり、現地統括責任者である三浦副代表も、学びを共にしていました。
現在でも、マキノスクールの人材育成の要ともいえるSCSAD（持続可能な農業・農村開発コース）はコロナ禍のため一時中断こそありましたが、有意義な研修が続けられています。アーシャの20年間は、牧野氏の40年間の奉仕に続く、大きなステップであったと考えています。これからも、紛争や貧困、差別などに負けることなく、アーシャは、人を育て、学び合える環境を作りだすことを持続可能にする使命を帯びています。
アーシャ20年の節目に代表理事を牧野氏に交代し、難局を乗り越えるべく努力中の国内事務局は、まだ体制が整っているとは言えませんが、もっとも経済的に厳しい状態でスタートした2024年度ですが、7ページにも記載しておりますように、様々なご支援を寄せていただいており、今も、アーシャの活動を継続できていることを心より感謝しております。
今後とも、皆様のご支援ご協力、どうぞよろしくお願いいたします。

国内事務局長　三浦孝子

ヨガパンツの共同開発でお世話になった那須高原（株）フィンランドの森に出店。サンタクロースさんと筆者

募　集
インドスタディーツアー

２０２５年3月3日（日）～3月11日（火）
本会プロジェクトと近隣の農村を訪問し、スタッフ、学生とグループに分かれ作業をします。
旅行代金：　￥130，000/１人
（渡航費は別途約11万円）
応募締め切り12月31日
経費に含まれるもの：滞在費、食費、
インド国内交通費、通訳代、観光費
催行：参加者6名以上。成田空港集合・解散
マキノスクールの卒業生が羽田もしくは
成田空港から同行します。
観光：プラヤグラージ、ブダガヤ、デリー
お問い合わせは email:：recruitment@ashaasia.org

私の給与から支払っていますよ」とニコニコしながらの返答。私が子どもの教育を支えています、という彼女の自負があるようです。政府系の公立高校卒で、当初全くPCに触ったこともなかった彼女が、今ではエクセルを使いこなし、会計事務を担っています。

２番目はマキノスクール、持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）卒のルマさん。彼女は16歳の時、マキノスクールが実施していた裁縫基礎コースを受け、優秀な成績だったことから同コースのインストラクターになりました。基礎コースの受講者は20名程で、約3割は上位カースト出身者でした。彼女たちは、糸や端切れ布が散らばったクラスの片づけや掃除を拒む等、下位カーストのルマさんにとっては、試練の日々だったことでしょう。その後、彼女はクチャクチャになった小額紙幣の束を私に差し出し、農村開発コースで学びたいと申し出たのです。

器具の滅菌作業中のルマさん

それまで英語を話すこともできない彼女でしたが、SCSADに入ってからは、当時の日本人学生とも仲良くなり、一生懸命勉強していました。今で食品加工事業になくてはならないスタッフの一人となり、ゲストに作業内容を英語で説明できるまでになりました。
ルマさんの父親はアルコールが原因で早世したので、彼女の給金は９人兄弟姉妹の教育費に充てられています。「私の兄弟には、お酒、たばこをやらないと誓わせたわ」。家庭での彼女の影響力の強さを伺える言葉です。恋愛結婚は絶対にしないと、断言する彼女。「家族が選んだ人と結婚したい」。伝統的価値観もしっかり持ち続けているルマさんです。

最後に少数先住民・コール族で指定カースト（アウトカースト）に属するシータさんの例を紹介したいと思います。彼女は村の高校を出てから早くに結婚し、５児の母親です。農村保健ボランティア育成のための研修会にいつも乳児を連れて参加していました。熱心に学ぶだけではなく、村での保健集会では、大勢の女性や村人の前で自信を持って説得力のある話ができるように変貌していました。そしてボランティア仲間からグループリーダーに選出されました。指定カーストの女性がグループ内でリーダーシップをとることは至難の業なのです。上位カーストの女性たちからもシータさんの人格が認められていたのです。それはインドの農村において意味ある変革とみてよいのではないでしょうか。良い影響を他の女性に与える可能性があるように思えます。

カフェの前で笑顔のシータさん

現在は、マキノスクールの門前で組合が運営している「グリーンカフェ」の主任として働いています。メニューは餃子、ラーメン、鶏の唐揚げ、豆腐の天ぷら等、村では彼女が経験したことのない料理ばかりです。努力家の彼女はそれらの料理法をすべて覚え、更に彼女自身が閉店を前より1時間半延ばしたので、放課後の大学生が来店しやすくなり、売上は伸びました。彼女の5人の子どもたちは母親をどのようにとらえているでしょうか？今度訊いてみたいと思っています。きっと、母親の努力を感じ取っているのではないかと思います。子どもたちはシータ同様インドの差別社会に屈しない人に成長することでしょう。小さい体に溢れる笑顔の彼女から家庭の暖かさと不屈の精神を感じ取ることができます。

マキノスクールの目指すもの

「農民の手による農民のための農村改善活動」が農村に活力と希望を与えているか、ということを常に中心に、活動を進めてきました。極力、農村出身者からボランティアやスタッフ職員を採用することに努めました。現在私を含め2名を除いてマキノスクールと関連事業である農業組合、縫製事業のスタッフ全員、農村から通っている男女です。また7名はマキノスクールの卒業生又は同スクールで実施した「農村女性のための農村保健事業」で活躍した元農村女性保健ボタンティアです。
彼女たちは変わりました。自信と希望を持ち続けています。これらの事実から言えることは、女性のよい意味での変貌は社会をよい方向へ変えてくれる力になるということです。伝統社会を否定し、拒否するのではなく、次の世代に向けて、伝統を進化させることができる人材が北インドの農村に必要なのです。女性に希望と自信を与えることができる農村在住女性インフルエンサーがもっと必要なのです。

農村開発と人材育成　多様社会共生を目指して

2024年度のSCSAD

アーシャ事業責任者　三浦　照男

2024年7月1日より9か月間の持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）が始まりました。北東インドより山岳地帯に住む青年3名、ミャンマーの少数民族から男女2名、そして日本より1名の学生が入学しました。全員、6月中旬には来校し、2週間の集中英語クラスを参加した後、本コースに進みました。

7月13日の入学式で讃美歌を歌うSCSAD学生。

土づくりと循環型複合農業

上:ボカシを作る
下:養鶏飼料を学ぶ

上:練床苗を学ぶ
下:合鴨水稲同時作の実践

小規模食品加工　菌床キノコ栽培

農場で栽培された農産物（モリンガ、レモン、穀類紛等）の加工

上：キノコの種菌をつくる
下：各自培養した菌種でキノコ栽培を学ぶ

健康で安全な食べものづくりを通して農村も自然も人も元気にする

リーダーシップの強化

上段：MSCNEスポーツデイ。学生が中心に企画
下段：土、村づくり、自然環境について参加型講義

生産者と消費者をつなぐ市場開拓の模索

左:有機　生産者による直接販売。
右:生産者へ質問する学生

有機農産物を購入し、加工販売している会社を見学

農民が設立した生産者の会社視察

2024年度SCSAD研修生紹介

トッチュイ　プンソク　24歳
国籍インド・マニプール州
送出団体　ギャンファームルート
民族：タンクル族
前職：職人
学びたいこと：私にとって新しい概念の食品加工を学びたい
卒業後は：食品加工を中心としたビジネスをしたい

ガイクワンポウ　ゴンメイ　23歳
国籍インド・マニプール州
送出団体　ロンメイナガバプテスト教会
民族　ロンメイナガ族
前職　自営農家　協会ボタンティア
学びたいこと：有機農業、キノコ栽培と果樹等の複合経営
卒業後は：有機農産物と加工食品の直接販売

エゼキエル　カメイ　27歳
国籍インド・マニプール州
送出団体　ロンメイナガバプテルト教会
民族　ロンメイナガ族
前職　有機農業栽培農家
学びたいこと：キノコ栽培
健康な食品加工
卒業後は：地元に帰り、有機栽培と食品加工を実践する

カル　ナン　43歳
国籍　ミャンマー
出身地　カチン州
所属　メタ開発機構
民族　カチン族
前職　プロジェクト調整員
学びたいこと：持続可能な農業と開発の概念と実践を学びたい
卒業後は：有機農業を私自身実践し同僚や地域の住民に伝えたい

ゾウ　ミョ　ナン　43歳
国籍　ミャンマー
出身地　カチン州
所属　メタ開発機構
民族　シャン族
前職：農村開発う推進員、緊急支援サポーター
学びたいこと：有機農業の概念、技術、実践
卒業後は：私の農村コミュニティーに私が会得したことを伝えたい

植西　訓聖　19歳
国籍　日本
出身地　千葉県
推薦愛農学園農業高校
入学前：岐阜県の山のハム工房ゴーバルと有機農家で研修
学びたいこと：日本では経験できない異文化の環境で農業やコミュニティーについて考え学びたい
卒業後は：仲間とコミュニティーをつくりたい

首都と山岳地帯へ2千キロの旅

10月17～24日までデリーと北部ヒマラヤ山岳地帯へ学生5名とスタッフ3名が研修旅行。多くの友人、地元の方々に助けられ有機農業の実態と有機農産物流通事情等、有意義でエキサイトできる学びを得ました。

上：マチガオン村の有機栽培農家を訪問。
下：旅の途中と最終日、学んだ事を話し合う。

上：長距離は汽車。
下：デリー・グルガオンでHASORAで有機農産物流通について学ぶ

上左：U.K. 州都ディラドゥンにある有機農業農産物販売店KIWIを訪問。**上中央**：有機生産者・バクチャン等による直接販売。
上右：車で山岳地帯へ。右下：食堂で食事

上記の研修旅行中、研修を引き受けてくださったHASORA代表八田舞さん、U.K.州都ディラドゥンを案内してくださった竹内かおりさん、2泊も自宅に宿泊させてくださった有機栽培農家バグチャンさんとそのご家族、そして長年の友人で現地NGO－MGVSを運営しているスレンダーさんに多大なご協力、ご支援を頂きました。感謝いたします

標高1600mのマチガオン村

2025年度SCSAD学生募集

- 学費　75万円：含まれるもの：研修期間中の宿舎＆食費、インド　国内交通費,研修旅行費、英語集中クラス代、月500ルピー（約900円）小遣い
- 渡航費、ビザ代、海外保険代は自己負担
- 応募資格：2025年6月より翌年3月5日9か月間インドに滞在できる方、高校卒業以上、又は大学を休学できる方、心身健康で、チャレンジ精神に富む方。
- 問合わせ：recruitment@ashaasia.org（担当三浦）